

高齢運転者の事故・違反の特性に関する調査研究—高齢運転者に関する総合的研究（Ⅱ）
（昭和 60 年度）

高齢ドライバーの事故特性については、かなり経験則に支配された運転行動パターンが見られるのではないかと推察される。そこで、高齢ドライバーの事故特性を多角的に深く掘り下げ、教育、指導のための知見を得ることを目的として 3 年計画で実施することとし、第 2 年度は運転の実態的な側面と意識的な側面の双方から高齢ドライバーの特性を明らかにするため、交通事故データの集計分析、事故当事者へのアンケートを実施した。

- ① 交通事故統計から、高齢ドライバーの事故は、出会頭事故と右折時が多い。事故の原因となった違反は、一時停止違反、優先通行違反、右折違反が多い。事故の原因では、ぼんやりとか考えごと等の「内在的前方不注意」が多い。事故の程度では、死亡、重傷など重大事故が多く、ことに原付や、自動二輪車に多い。事故時の通行目的地は、地域内交通が多い。雨天、早朝、夜間での高齢群の事故は、他の年齢群に比べて低いが、自動二輪の高齢群では雨天での事故が多い。
- ② 交通事故の第 1 当事者 1,000 人へのアンケート結果をみると、高齢者群ほど自分の運転を慎重であると評価している。しかし、一時停止不停止や信号の変り目を加速して通過するなど交差点での運転行動や、貨物車の飲酒運転について、やや問題がみられる（図）。事故時の心身の状態では、高齢群で心配事といった精神的不安徴候が特徴的である。事故に至る前の相手の認知については、高齢群では気付いていたとする者が多いが、気付いた時点で、アクセルやブレーキによる減速行動、つまり事故回避行動を取る者の割合が低い。事故に伴う違反の背景を乗用車の直進時でみると、高齢群では、状況判断において自分の都合の良いように短絡化する合理的傾向のほか、交通状況の認知について特定の事象に注意が集中し過ぎる一点集中傾向がみられる。高齢群の事故後の運転継続意志については、「すぐに又はできるだけ早くやめる」という者が 3 割みられるが、多くは運転を続けるとしている。

図 危険な運転行為の得点化による比較 (乗用車)

